

い女性に対して妄想を膨らませる。

バスケットボールの試合のあと、レスターとキャロリンは、娘のジェーンに体育館の出口で会うが、レスターはジェーンと一緒に出てきたアンジェラに高揚した声で早口に話しかける。「家まで送ってあげようか」とレスターが言うと、「車があるから大丈夫」とアンジェラが答える。そして彼は、「娘のジェーンの友達、私の友達だ」と宣言する。両親が去ったあと、ジェーンは「もうこれ以上の惨めさはありません」とレスターについて愚痴を言うと、アンジェラは「お父さんは感じのいい人」と切り返す。娘にとってレスターという父は、理解不能な変態のおじさんでしかないが、アンジェラにとって彼は、自分の前では胸をドキドキさせて恥ずかしそうに話す少年とうつつようだ。

その後、アンジェラがジェーンの部屋に泊まりに来たとき、レスターはジェーンの部屋の扉に耳をあて、アンジェラとジェーンの会話を盗み聞きする。そのとき、アンジェラは「もしあなたのお父さんが胸と腕を鍛え上げたなら、男女の関係になってもいい」と打ち明ける。ジェーンは「気持ち悪い」とその考えを拒絶する。レスターはアンジェラの一言で、俄然若さを取り戻そうと、家の周りをジョギングしたり、家の車庫でバーベルを使って筋力トレーニングを始める。

四十二歳のレスターが、高校生の娘の友人に恋愛感情を抱き、妄想を膨らませて、若さを取り戻そうとするのは、心の中にある空虚を埋めるためだ。若さへの渴望は四十代であっても衰えることはない、とレスターは信じる。何歳になっても、若さを追求し体現しようとするのがよいという価値観が、中流階級の白人の中にあると思う。

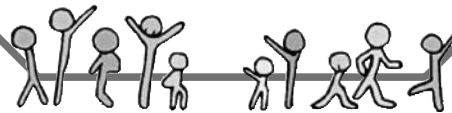
視点を妻のキャロリンに移そう。彼女は仕事において上昇志向が強い。しかし、彼女は不動産の物件を売ることに四苦八苦している。そんなとき、彼女は仕事関係のパーティーで、同じ不動産業を営むバディー・ケインと出逢う。彼は優秀な事業家で、キャロリンが望むものをす

でに手に入れている。キャロリンにとっては憧れの存在であり、広告会社を首になった夫のレスターとは大違いである。バディーはある日、キャロリンと密会をして、妻と別居したと報告する。キャロリンもこのときすでにレスターとの夫婦の絆は切れていて、これで二人の間の壁はなくなり、男女関係に発展する。

レスターとキャロリンの夫婦のあり方は、アメリカの中流階級の白人では珍しくない。キャロリンを演じたアーネット・ベニングは、インタビューの中で、「自分が演じた役は親しみがあり、映画の中だけではなく、日常生活でもよくあることだ」と言っている。夫婦関係が崩壊して、それぞれが気になる、もしくは親密な異性がいるのが普通の状態というわけだ。もちろん、そのような崩れかけた夫婦関係において、それぞれ自分たちの関係性に意味があるかどうか、疑問を持つに違いない。また娘のジェーンはこの崩壊しかけた家族の中では孤立していて、安心できる場所がない。そのような言葉にならない疑問や不安を俳優たちが演技を通して上手に表現しているのが、この映画の面白いところだと思う。

映画に描かれてきた 「インディアン」

経営学部 地村 みゆき



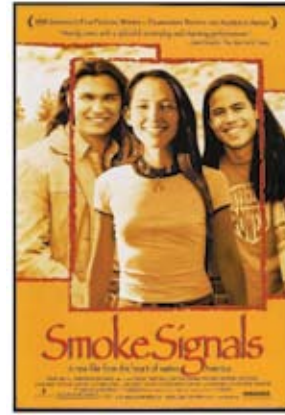
「アメリカ・インディアン」あるいは「アメリカ先住民」と聞いたら、あなたはまず何を想像するだろうか？ 名古屋に沢山の店舗を構えるインディアンズステーキハウス？ 店舗入り口には、長髪に羽飾りをつけて上半身裸の男性の人形がお目見えする。アメリカ先住民の研究をしている身としては、このステーキハウスの「インディアン」という表象の使い方に色々と文句を申したいところではあるが、これは他のコラムでの議論に取っておくことにしたい。^{*1}



インディアンズステーキハウス東片端店

こうした、日本でもよく見られる「インディアン」のステレオタイプを形成・流布してきた最大の犯人はハリウッド映画である。ハリウッドの西部劇は長らく、羽飾りをつけ上半身裸で馬に乗り、雄叫びをあげながら白人の住居を襲撃する「野蛮な」先住民を描いてきた。彼らは、「明白なる天命」のもと、ジョン・ウェイン等が演じる白人のヒーローにいずれ駆逐される運命にあった。その中で重宝されたのは、ディズニーの『ポカホンタス (Pocahontas)』のような、植民者の持ち込んだ「文明」に興味を持ち、白人の入植や開拓の手助けをするインディアン・プリンセスであり、『ローンレンジャー (The Lone Ranger)』で白人のヒーローと肩を並べ、バットマンにとってのロビンのように活躍するトントである。映画は、多様な文化的・歴史的背景を持つアメリカ先住民諸部族があたかも皆、一様に「羽飾りをつけティピー^{*2}に住み、上半身裸で馬に乗り、雄叫びをあげながらバッファローを狩り」、時に「母なる大地と会話するスピリチュアルな人々」であり、白人文明の前にいずれ「消えゆく人々」であるかのように、私たちの頭の中にそのイメージを植え付けてしまったのである。

これらのステレオタイプに対して、アメリカ先住民自身はどう考えていたのだろうか。それを私達に教えてくれる映画の一つが、1998年に公開された『スモーク・シグナルズ (Smoke Signals)』だ。この映画は、スポケーン・コー

Smoke Signalsの映画ポスター^{*3}

ダレン族出身の人気作家シャーマン・アレクシーが脚本を手掛け、シャイアン・アラパホ族出身のクリス・エア監督のもと、先住民俳優たちが結集して作った映画である。先住民が作る先住民についての映画として初の試みだったこともあり、脚光を浴びた。さらに、2018年には「文化的、歴史的、または審美的に重要」であるとして、アメリカ国立フィルム登録簿に保存された。

この映画の面白いところは、先住民の若者たちが、映画が流布してきた「インディアン」ステレオタイプを笑い飛ばしているところだ。彼らは、ハリウッドが長らく投影してきた「上半身裸で羽飾りをつけ馬に乗る」先住民ではない。アメリカに住む他の若者と同じようにシャツにジーンズを身につける若者たちだ。映画には、先住民の登場人物が、テレビの西部劇で追われる先住民を見て発言するシーンがある。そして「テレビに映るインディアンも哀れだが、

Smoke Signalsの主人公ビクター(左)とトーマス(右)^{*4}

もっと哀れなのは、そのインディアンを見ている我々だよな (The only thing more pathetic than Indians on TV is Indians watching Indians on TV.)」とクスクス笑う。そこには、今を生きる先住民の若者が「消えゆく運命にあるインディアン」をテレビで見、それを日常的に消費しているという皮肉がある。『スモーク・シグナルズ』は、アメリカの植民地主義的な歴史の中で翻弄されてきた先住民が、貧困や過去のトラウマに悩み、もがきながらも、強かに今を生きる姿を巧みに描き、大衆が抱くステレオタイプを書き換えようと働きかけるのだ。

このように、映画は先住民のステレオタイプの形成・流布の装置でありながら、先住民にそのステレオタイプに反論し、書き換える機会を提供する場にもなった。アカデミー賞における多様性の問題が叫ばれて久しい。現在では、映画に限らずとも様々な映像媒体を通し、マイノリティが自分たちを語り始めている。^{*5} 今後も引き続き、そこで投げかけられる多様性に注目していきたい。

*1 私はインディアンズステーキハウスには行ったことはないが、ステーキはリーズナブルかつ美味しいそうだ。

*2 ティピーとは、主にアメリカの平原部の先住民諸部族が利用する円錐型の移動式住居のことである。

*3 Smoke Signals Movie poster (USA), Photo 12 / Alamy Stock Photo (Image ID: R2H7T3)

*4 Smoke Signals, Photo 12 / Alamy Stock Photo (Image ID: B7WPDW)

*5 今、私が最も注目している作品は、2021年7月にアメリカのHuluで始まったFXオリジナルドラマ『リザベーション・ドッグス (Reservation Dogs)』である。オクラホマ州東部の田舎町に住み、カリフォルニア行きを夢見る先住民の若者たちの姿をコメディタッチで描くこの作品は『スモーク・シグナルズ』と同様、様々な「インディアン」ステレオタイプを笑いに変え、聴衆の固定観念に挑戦している。日本で公開されたらぜひ見てほしい。



中国出身の女性映画監督クロエ・ジャオが、アジア系としては、韓国のポン・ジュノ監督『パラサイト 半地下の家族』に続き、『ノマドランド』で第93回米アカデミー賞作品賞受賞の快挙を成し遂げた。そして、女性としては、ジェームズ・キャメロン監督『アバター』をおさえて栄誉に輝いた『ハート・ロッカー』のキャスリン・ビグローに次いで、史上2人目となった。逆にいえば、90年以上に渡るアカデミー賞の歴史のなかで、作品賞を受賞した女性監督はたった2人しかおらず、多様性、包括性の観点からいえば、アメリカの映画制作において、いかに女性が、非白人女性はさらに、マイナーな存在であるかを社会に直視させる出来事でもあった。

2010年代を振り返れば、アカデミー賞における多様性の欠如を非難した#OscarsSoWhite騒動、また、絶大な権力を掌握していた有名プロデューサー、ハーヴェイ・ワインスタインによるセクハラに対する裁判と#MeToo運動などがあり、そうしたなかアカデミーの改革はまったなしの状況でおこなわれつつある。そこで、2020年に新たな段階の改革内容として発表されたAcademy Aperture 2025の作品賞に関わる部分を参照し、『ノマドランド』の受賞理由、さらには、2021年11月公開予定のジャオ監督によるマーベル映画『エターナルズ』に対する改革の影響について検討したい。

アカデミー特別名誉賞を授与された黒人監督スパイク・リーが、白人ばかりがノミネートされているとして、授賞式をボイコットすると表明した2016年、映画芸術科学アカデミーは、2020年までに、女性と、取り上げられること